

馬車が止まった。

長い旅路の果て、辿り着いたのは敵国の王城。白亜の壁が朝日を受けて輝いているのが、薄汚れた馬車の窓越しに見えた。

（綺麗……）

場違いな感想が浮かんで、すぐに打ち消す。ここは敵国だ。私は平和の証として差し出された人質——城の美しさに見惚れている場合ではない。

右手を握りしめる。掌の中には、お母さまが最後にくれた小さな押し花のペンダントがある。故郷の野に咲く白い花。子供の頃から一等大好きだった花だ。別れ際、お母さまは泣かなかった。ただ、この花を握らせて、「どんな時も顔を上げなさい」と言って、私を送り出した。

（……泣かない。何があっても、泣いたりなんかしないわ）

それだけを心に刻んで、この馬車に乗り込んだ。敵国への旅路は随分と長く感じられた。馬車に揺られ続けながら、泣きたい夜もあったけれど、それでも私は、涙は一粒も流さなかった。

御者が恭しく扉を開ける。兵士に促されるまま、私は馬車を降りた。

眩しさに目を細めた瞬間、周囲の空気が変わったのを感じた。

「あれが……」

「噂の姫君か」

ひそひそと交わされる声。好奇と侮蔑が入り混じった視線が、肌を刺すように纏わりついてくる。異国の言葉、異国の装い、景色、匂い。何もかもが違う場所に、たった一人で放り出された。

（……上等よ）

怯えた顔など見せてやるものか。背筋を伸ばし、真っ直ぐ前を見

据える。たとえ人質であっても、この国に膝を屈するつもりはない。私は誇り高きヴェルニア王国の第三王女なのだから。

兵士に連れられ、城内へと足を踏み入れる。

廊下は広く、天井には繊細な装飾が施されていた。壁には見たことのない様式の絵画が並び、窓から差し込む光が大理石の床を照らしている。どこもかしこも金と白で統一された意匠。敵国でありながら、その豪奢さは認めざるを得なかった。

（これが……アルヴェイン帝国……）

帝国と祖国の関係は私が幼い頃から年々悪化していた。幾度となく戦を仕掛けられ、そのたびに敗れて不利な条約を結ばされた過去がある。国力の差は歴然で、此度の戦では私を差し出すことでようやく和平を結んだのだった。

——それは、私の命と引き換えにしたのも同然だった。

そう思うと、少しだけ胸の奥が軋んだ。けれど、ずっと悲観しているつもりはない。これは私が選んだことだ。姉上たちには夫がいる。弟には祖国を守らなければならない責務がある。祖国が差し出せるのは、第三王女の私しかいなかった。だから、自ら人質になることを望んだのだ。

(……後悔なんてしてないわ。自分で選んだ道だもの……)

そう自分に言い聞かせながら、案内の兵士の後ろを歩いた。

やがて、大きな扉の前で兵士の足が止まった。

「謁見の間です。陛下がお待ちです」

兵士の言葉に、小さく頷く。掌の中の押し花のペンダントをぎゅっと握りしめて、扉が重々しい音を立てて開かれるのを待った。

謁見の間は、廊下よりもさらに豪奢だった。

高い天井から吊り下げられた燭台が、淡い光を落としている。赤

い絨毯が真つ直ぐに続き、その先には玉座があつた。

玉座に座る老齡の男が、皇帝だろう。白髪に彩られた威嚴ある顔立ち。だが、その目には覇氣よりも疲労が滲んでいるように見えた。戦を終えた国の主というものは、敵も味方も等しく疲弊するものなのかもしれない。

その隣に、若い男が立っていた。金髪を撫でつけ、にやついた笑みを浮かべている。装飾過多な衣装に、脂の乗った頬。一目で分かる——権力に甘やかされた人間の顔をしている。

そして、反対側にもう一人。

(……銀色の髪)

そのあまりの美しさにはっと息を呑んだ。

差し込む光を受けて淡く輝くその髪の下には、精巧な彫刻のように整った、人間離れした美貌があつた。切れ長の目は一切の感情を

映さず、ただ冷ややかにこちらを見つめている。黒い軍服に包まれた長身の体躯。他の誰とも纏う空気が違う。王でも貴族でもない、戦場で研ぎ澄まされた者だけが持つ威圧感と、誰もが目を奪われずにいられないほどの危険な色気を放っていた。

背筋が粟立った。怖い——と、本能がそう訴えている。

なのに、どういうわけか目が離せなかった。

恐怖とは違う何かが、胸の奥でざわめいている。この感覚を、何と呼べばいいのか分からない。ただ、こちらを静かに見据える銀色の瞳に吸い込まれそうになるのを、必死に堪えた。

（あの男が……）

敵国の英雄にして、冷酷な死神。戦場で幾度となく我が国の兵を打ち破った、最も恐れられているアルヴェイン帝国の名将。

（……名前は確か……レイドだったかしら……？）

口の中で転がした名前に、不思議な既知感があつた。けれど、氷のような銀色の瞳に射抜かれたまま、それ以上考える余裕はなかった。

「これはこれは、美しい姫君だ」

沈黙を破つたのは、下品な表情を貼り付けた金髪の男だった。品定めするような目で、私の全身を舐め回すように見る。足元から胸元まで、ねっとりとした視線を寄こす。

（嫌な目だわ……）

故国の宴で、酔った年寄りの貴族に向けられたことがある。あの時は侍女が間に入ってくれたけど、ここには——私の味方は誰もいない。

「父上、この姫は私が預かりましょう。人質とはいえ王族の血筋、丁重に扱わねばなりません」

その男——後から第二皇子と知った——の目が纏わりつくように私の身体を這い回るのを感じて、吐き気を覚えた。

丁重に扱う、などと言ってはいるが、その目的は——その目が全てを語っているではないか。

「殿下のお心遣い、痛み入ります」

低く、冷たい声が響いた瞬間——謁見の間が、ピンツと張り詰めたように凍りついた。

銀髪の男が、一步前に出た。その一步で全員の視線が彼に集まった。

「しかし、人質の管理は軍の管轄かと。私が預かりましょう」

静かな声だった。怒鳴っているわけでも、威嚇しているわけでもない——はずなのに、有無を言わせない響きだった。

「……レ、レイド將軍」

第二皇子の声に、僅かな怯えが滲んだ。金髪を撫でつけた手が、微かに震えている。

「将軍が人質の世話などと、それはそれでおかしな話ではないか」
「和平が成ったばかりの今、人質に何かあれば戦の火種になりかねません。ここは私が責任を持って管理いたします」

「しかし――」

「陛下」

レイドが皇帝に向き直る。その動作一つで、第二皇子の言葉が断ち切られた。まるで存在しない者に対するように、一切の関心を向けずに、レイドは皇帝だけを見据えている。

「ご指示を」

それは指示を求める男の声ではなかった。皇帝でさえ容易には逆らえないのだと、その場の空気が物語っていた。老齡の皇帝は一瞬

だけ眉を顰めたが、やがて深く息を吐いた。

「……お前の好きにせよ」

許可が下りた瞬間、レイドがこちらを見た。

氷のように冷たい銀色の瞳と目が合う。

私を真っ直ぐに射抜いたその奥底に、一瞬、火傷しそうなほどに重く、ドロドロとした熱のようなものが揺らめいた気がした。

（……気のせい……かしら……？）

「こちらへ」

レイドはそれだけ言うと、背を向けた。兵士に促されるまでもなく、私はその後を追った。第二皇子の視線が背中に刺さるのを感じながら。

（……何を考えているのかしら？）

廊下を歩きながら、内心で考える。

第二皇子の視線も気持ち悪かったが、この男はもっと恐ろしい。纏う空気が他の人たちとは違う。圧倒的な強者だけが持つ、逆らうことを許さない威圧感。

あの皇子に預けられるよりはましなのかもしれないけれど、人質として生きていく私にとっては大差のないものだろうと思い直した。
(……でも、どうして將軍自ら?)

人質の管理など、部下の者に任せれば済む話だ。この男は『ここは私が預かる』というようなことを言っていたが、わざわざ自分で預かる理由がない。第二皇子と敵対関係にあるのか。それとも、何か別の意図が――

考えても答えは出ない。ただ、レイドの背中を見つめながらその後ろを歩くしかなかった。

長い銀髪が、歩くたびに揺れる。広い背中。がっしりとした肩幅。

黒い軍服の上からでも分かる、鍛え抜かれた体躯。

この男は、私の国の者たちからしたら仇なのだ。一体この戦争で、どれだけの兵士を殺してきたのだろうか。我が国の兵士たちを、どれだけ――

胸に湧き起こる憎しみで、ついその背中を追う視線が自然と鋭くなってしまう。けれど、きつとレイドくらいの男なら気付いているだろうに、一度も振り返らなかった。

やがて、一つの扉の前で足が止まった。

「ここが、当分のあなたの部屋だ」

扉を開け、中に入るよう促される。

予想に反して、部屋は広かった。大きな窓から光が差し込み、調度品も一通り揃っている。寝台には清潔な寝具が敷かれ、暖炉には薪がくべられていた。小さなテーブルと椅子が二脚。壁際には衣装箆箆まである。敵国の人質には行き過ぎるくらいの好待遇だった。

「……思ったより良い部屋なのね」

不思議に思っと思わず口をついて出た言葉に、レイドは小さく瞬きをした。

「——気に入ってもらえたのなら、良かった」

先ほどのまでの凍りつくような声とは違う、どこか安堵したような、ひどく穏やかな響きだった。

とはいえ、人質に対する事務的な気遣いの言葉なのだろう。変に憐れまれて同情されるよりはマシだと思った。

私が部屋に足を踏み入れると、背後で扉が閉まる音がした。

振り返ると、レイドも部屋の中に入ってきていた。

——かちやり……と、鍵をかける音がやけに大きく響いた。

異性と二人きりという状況に、心臓が跳ねる。逃げ場のない空間。窓からの光が、レイドの銀髪を白く染めている。逆光で表情が読めない。

「あなたの扱いは、俺次第だ」

逃げ場のない密室。見下ろしてくる銀色の瞳はひどく静かだったが、そこには逆らうことを許さない、息が詰まるような重い熱が宿っていた。

「……ええ……わかってるわ……」

この男は、私に何をさせるつもりなのだろうか。声が震えないように必死に唇を引き結びながら、私は掌の中の押し花のペンダントをきつく握りしめた。

「——あなたを預かりたいと言った第二皇子が、どういう男か知っているのか」

唐突な問いだった。先ほどの不愉快な視線を思い出して、思わず眉を顰める。

「……知らないわ」

「三年前、同じように人質として送られてきた女がいた。北方の小国の姫だ。皇子に預けられて——三ヶ月後、その姫は自ら命を絶った」

その言葉に、息が止まった。私と同じような境遇の姫の末路にぞつとする。

「あのバカ皇子に屈辱的な目に合わされたせいだ。けれどあの男は飽きた玩具を捨てるように、すぐに次の遊び相手を探し求めている」

淡々とした声なのに、その内容は酷いものだった。

「――あれは獣と同じだ。今夜にでもこの部屋に忍び込んで、手を出そうとするかもしれない」

「……」

「腐つても奴は皇族だ。もし奴が本気であなたを自分のものにする
と考え、公式に手続きを踏めば、いくら將軍の俺であっても、表立
って止めることは難しくなる。だから――」

レイドの声が、僅かに詰まった。

「――先に、俺が抱く」

一瞬、その言葉の意味が分からなかった。

「……は？」

「既成事実を作る。あなたがすでに『將軍の女』であるとしらめ
れば、奴も軍を敵に回すような真似はできない。それで身を引くは

ずだ」

「ちよつと待って。意味が……言っている意味が分からないのだけ
れど」

「——残念ながら、あなたに選択権はない」

男はそう冷たく言い切った。そして——一步、こちらに近づいてくる。

私はそれを見て、反射的に後退った。けれど、すぐに背中が壁に当たった。冷たい石の感触が、薄い衣越しに伝わってくる。

既成事実を作る？ 皇子が手出しできなくなる？ それってつまり、皇子から私を『守るため』に、この人が私を抱くということ？

私を氣遣ってくれるのは——百歩譲って、ありがたい。けれど、だからといって自分が抱くなんて、守り方として極端すぎやしないだろうか。

そう言い返さなければならぬのに、見下ろしてくる銀色の瞳は、冗談を言っているようには見えなかった。

圧倒的な体格差と、逃げ場のない空気に身体の芯がすくみ上がった。

「待って……話を……」

顎を掴まれた。無理やり顔を上げさせられる。

至近距離で見る銀色の瞳。やはり冷たくて——なのに、その奥に、何かが燦っているようでもあって。

「っ、……」

何か言おうとして、けれどレイドは口を閉ざした。見下ろしてくる銀色の瞳が苦しげに揺れている。

（……なんで……そんな……苦しそうな目をしているの……？）

やがて、その大きな手が、震えながらも私の頬に触れ——唇を塞

がれた。

くちゅ……くちゅ……と音を立てながら、深く、貪るように舌を絡めとられる。息ができなくなつて、抵抗しようと胸を押したが、びくともしなかつた。

ちゅ……♡じゅるる……♡♡

「んむっ……♡」

息の隙間から、無意識の甘い声が漏れた。

（なに、これ……っ）

心臓がバクバクと煩い。これから我が身に降りかかることを思うと、恐怖で身体が竦む。

そう、これは恐怖——のはずだった。なのに、粘膜を這い回る彼の舌は、決して私を傷つけず、隅々までねつとりと口内を味わい尽くした。

唇を奪われた瞬間から、その熱に当てられて、身体の内がじわりと熱くなっていく。

れろ……♡ちゅぷ……♡♡

「ん……」

ようやく唇が離れた時には、私は息も絶え絶えになっていた。

「っ……は、あ……」

荒い息の向こうで、レイドがじっとこちらを見下ろしていた。

(……こんな……屈辱……初めてだわ……なのに……)

まるで、この男の口付けに反応するかのようにな、お腹の内がじんじんと疼いている。

ドレスの背中に手が伸びて、留め具が外されていく。一つ、二つ、三つ——慣れた手つきだった。布が緩んでいき、ついに肩から滑り落ちていく。

「あっ……やめ……っ」

いくら強がっていても、そう簡単に割り切れるものでもない。異性の前で肌が晒されていく羞恥心に、頬に熱が上っていく。

「嫌か？」

「あ、当たり前でしょう……!!？」

「そうか」

そう言いつつも、レイドの手は止まらなかった。ドレスが腰まで落とされ、最後の薄い肌着だけが残された時、冷たい空気が肌を撫でて、思わず身を竦めた。

咄嗟に腕で胸を覆い隠そうとしたけれど、その手首を掴まれて、いとも簡単に後ろの壁に頭の上で押さえつけられてしまった。——力の差が、絶望的なほどはつきりと分かった。

「——隠さないで」

「……っ」

レイドの視線が、薄い肌着越しに胸の上を滑る。あの第二皇子のような下卑た色はない。見つめられているだけで肌が粟立つような、ただひたすらに熱く、重い視線だった。

（……なに……？）

——けれど、その視線の意味を深く考える間もなく、有無を言わせぬ熱い掌が、胸をふわりと包み込んだ。

「ん……♡」

くすぐったいような感触に、思わず声が漏れ出てしまい、口を噤んだ。

（今の、聞かれた……？）

レイドの表情は変わらない。ただ、指先がゆつくりと動き始める。布越しに、指の腹でぷくつと膨らんだ先端を擦られる。

すり……すり……♡

「ひっ……♡」

自分でさえ碌に触れたこともないところ——なのに、すりすりさ
れているうちにお腹の奥がますます熱くなっていく。

「……震えているな」

「……」

「乱暴にはしない。怖がらないでいい」

くにゅ、と、今度は意図的に、肌着の上から乳首の周りを親指と
人差し指でやさしく摘まれた。

布越しなのに、指の形がはつきり伝わる。きゅ、きゅ、と、繊維
が擦れるたびに、ぴりぴりとした刺激が走る。

私は、唇を引き結んで、声を押し殺した。

（……絶対に……声なんか……漏らすものですか——）

けれど。先端がつんと尖って、肌着を押し上げていくのが自分でも分かった。

「ここ、気持ちいいのか？」

「っ……」

言い返す言葉が出てこない。レイドの指先が、立ち上がった先端を執拗に責め立てる。

くり……くり……♡

指の腹を使って、ゆっくりと転がされる。

「……っ、ん……」

転がされる合間にきゅっつつねられると、鼻から息が漏れ出てしまう。

くりくり♡きゅ♡

「んっ……」

(だめ……声……出しちゃ……だめ……)

レイドの指が止まった。そして——ついに、肌着の紐が解かれた。するりと布が滑り落ちて、胸が完全に露わになる。

「あ……」

あまりの恥ずかしさにぎゅっと目を瞑った。見ないで——という言葉は声にならなかった。先端をつんと尖らせたみつともない姿を、よりにもよってこの男に曝け出しているなんて。

嘲笑されるかと思った。けれど、沈黙の中で私に向けられていたのは、肌が粟立つほど重くて熱い視線だった。

むにゅ……♡

「んっ……♡」

直接触れられた瞬間、布越しとは比べ物にならない熱が肌に染み込んできた。大きな掌に包み込まれ、柔らかく揉みしだかれる。

きゅ♡くりくり♡

「あ、ふ……っ」

指先が敏感な先端を捉えた。爪を立てるようにカリカリと引っ掻かれ、歯を食いしばって耐えようとするが、背筋が震えてしまう。

「……声を抑えているのか」

「……」

「無理はしないほうがいい。あまり強く噛むと血が出るぞ」

淡々とした声だった。嘲るような響きは一切ない。それなのに、必死に取り繕った強がりをもとも簡単に見透かされていることが、ひどく屈辱だった。

片手で両手首を壁に縫い留められたまま、私は身動き一つ取れない。

ふいに、レイドの顔が近づいてきた。

「え……ま、待っ——」

ちゅぱ……♡ぢゅるる……♡♡

「ひっ……♡」

指で弄られていないもう片方の先端を、熱い唇が塞いだ。

背中が壁から離れ、身体が大きく跳ねる。片方は指の腹でぐにぐにと押し潰され、もう片方は舌で絡め取られ、唾液の音を立てて吸い上げられる。

ちゅうううっ♡♡ぢゅるる♡♡

「っ……ん、んう……！♡♡」

声を殺しきれなくなってきた。食いしばった歯の隙間から、息と一緒に甘い音が漏れる。手と口、左右同時に違う刺激を与えられ、壁に押し付けられたまま立っているのが精一杯だった。

レイドの舌が乳首を舐め回すだけでなく、その周囲の柔らかな膨

らみまで這い回る一方で、反対側は執拗にぴんっ、と指先で弾かれる。

「ん……っ♡♡んんっ……♡♡」

（やだ……こんなの……♡）

じわり……じわり……と、下腹部に熱が溜まっていくのを感じた。触れられてもいないのに、そこがきゆうつと痛いくらいに疼く。

——ふいに、レイドの動きが止まり、ゆっくりと私の前で膝をついた。

「……え……な、何を……」

サラサラと流れる銀色の髪を見下ろす。レイドが、私の前に跪いている。その姿は戦場で敵を屠る將軍の姿とはかけ離れていた。

スカートの裾に手がかかる。捲り上げられて、太ももが露になる。

「やっ……」

下着に指が引っかかった。引き止める間もなく、するすると引き下ろされてしまった。

「な、や……み、見ないで……っ」

「……濡れている」

その言葉に心臓が止まりそうになった。

嘘だと言いたかった。そんなわけないと——でも、先ほどから下着の布が少しずつ湿っていくのを、自分でも感じていた。

「……まだ足りない。このままでは痛む」

「え——」

私がおかを言う前に、ふわりと身体が宙に浮いた。

膝裏と背中を支えられ、軽々と抱き上げられる。そのまま数歩歩き、広い寝台の上に下ろされた。

柔らかいシーツに背中が沈み込む。逃げようとするより早く、レ

イドが私の足首を掴んだ。

「な、なにを——」

「……力を抜いて」

淡々とした声のまま、膝の裏に手が回される。ぐんと大きく外側へ押し広げられ、両膝を立てた無防備な体勢にさせられた。

「あ……っ、だめ、見ないでっ……！」

冷たい空気に触れて内股が震える。脚を閉じようともがくが、レイドの手がしっかりと足首を固定していてびくともしない。

完全に剥き出しになった私の最奥を真っ直ぐに見つめながら、レイドが大きく開かれた脚の間に顔を沈めた。

（……嘘、そんなところ——）

れろお……♡

熱い舌が、濡れそぼった秘所を舐め上げた。

「ひっ……♡」

思考が吹き飛んだ。こんな——こんなところを舐められるなんて。知識としても、経験としても、何もかもが未知のことだった。

「やっ……やめ……っ」

ちろ♡ちろ♡

「ん……っ♡……っ♡」

唇を噛んで声を噛み殺す。舌先が、割れ目をゆっくりなぞっていく。れろお……れろお……と、びらびらの縁を辿るように丁寧に、全体を舐め尽くしていく。

（やだ……こんな場所、舐められて……屈辱なのに……どうしてこんな……）

必死に歯を食いしばって耐えようとするけれど、舌の感触が、想像もなかったほどに甘くて、熱くて——触れられるたびに、身体

の奥がじんじんと疼いていく。

れろお……♡れろお……♡

「……ふっ♡ん……♡」

鼻から息が漏れる。声にならない声。

レイドの舌が、一番敏感な先端の回りを焦らすように何度も往復する。けれど、周囲を丁寧に舐めるばかりで、一番熱を持って尖っている芯の部分には、わざと避けるようにして触れてくれない。

（もどかしい……もっと、じくじく疼いている一番上のところを舐めてくれれば……）

無意識にそんなことを考えていることに気が付き、はっとした。

（私……今……何を……？もっと、舐めて欲しいなんて……）

敵に舐められて、足りないなんて——そんなこと、思っていないはずがない。

「我慢しないでいい」

心を見透かされたように言われ、私は必死に声を振り絞った。

「……っ、うぬぼれないでよ……。敵のあなたに触られても……。私は、ちつとも……。っ」

「……こんなに濡らしているのに？」

「う……。それは……」

「……身体に聞いてみた方が早そうだ」

じゅるるるるっ♡♡

急に音を立てて激しく吸われて、身体がビクンと跳ねる。秘所全体を唇で包まれて、ぢゅぢゅぢゅと音を立てて吸い上げられる。

「ひ、あっ♡♡」

不意打ちで堪えられず、誤魔化しようのない悲鳴が漏れ出てしまった。

（今の……何……♡）

知らない感覚。頭の中で火花が散ったような、鋭い快感。

レイドの舌先が、ついに——ズキズキと痛いほどに疼いていた小さな突起に触れた。

ちろっ♡♡

「……っ♡♡」

身体がびくりと震えて息が止まる。さっき、欲しいと思ったところをピンポイントに舌で触られると——

「……ここ、気持ちいい？」

「ちがっ……♡」

「違う？舌で突くたびに腰が震えている」

舌先でちろちろと弾かれる。ぷくつと膨らんできた先端を突いたり、くるくるとこね回したり。

ちゅば……ちゅば……♡♡ぢゅぢゅぢゅうう♡♡

「んっ……!？♡♡ん……う、んっ♡♡」

口を閉じて耐えようとするのに、その隙間から、どうやっても甘い音が滲み出していく。抑えきれない声が部屋中にみっともなくこだまする。

(やだ……こんな……♡)

恥ずかしさと快感がぐちゃぐちゃに混ざる。頭ではだめだと分かっているのに、身体は勝手にレイドの舌を求めてしまう。腰がレイドの舌の動きに合わせて微かに揺れているのが自分でも分かって、泣きたくなった。

「……指を」

「え……っ♡」

返事をする間もなく、濡れた入口に指先が触れた。指先でくちゅ

……くちゅ……としっかり濡れているのを確かめたかと思うと、ずず……と、ゆっくりと侵入してくる。

「ん……うっ♡」

異物感——自分のものではない何かが、中に侵入してくる感覚に本能的な恐怖を覚える。でも——痛くは、なかった。舌でたっぷり濡らされていたからだろう。

「きつい……」

「あ、当たり前、でしょ……っ♡こんなこと……初めてなんだから……っ」

ぬちゅ……ずちゅっ……♡

軍人特有の無骨な指が、狭い入り口を押し広げながらゆっくりと侵入してくる。今まで何も入ったことのない中をみっちりと埋め尽くされる感覚に、思わず身体が強張った。

きつく締め付けて押し返そうとするのに、自分から溢れ出た蜜のせいで、指はずるずると一番深いところまで沈み込んでしまう。

ずりっ、と中で指が曲げられた。ひときわ熱を持っている天井側の肉を、指の腹で直接えぐるように擦り上げられる。

「ひあっ！？♡♡」

今までとは違う、背筋を貫くような強烈な痺れと鋭い快感。声にならない悲鳴を上げて身体が大きく跳ね、気づけばレイドの肩に縋るようにしがみついてしまっていた。

「……ここか」

「そこっ……そこ、だめえ……♡♡」

「だめと言いながら、あなたは俺の指をきつく締め付けている」

ぐり♡ぐりぐり♡♡

指が容赦なく同じ場所を押し潰す。同時に、離れていた熱い舌が

再びクリトリスに戻ってきた。

ぢゅるる♡♡ぢゅぢゅ♡♡

「ん……っ♡♡ん、ん……っ♡♡」

舌先で敏感な豆をちゅうっと吸い上げられながら、同時に指の腹が中の膨らみをこすり上げる。外と内を挟み撃ちにするような絶え間ない刺激に、下腹部がじんと痺れて熱くなった。

絶対に敵になんて屈しない。そう意地を張って息を止め、必死に唇を噛み締めて耐えようとする。

けれど、レイドの無骨な指が中の壁を撫で回すたび、頭で考えるより先に身体が勝手に反応してしまう。

ぢゅっ♡♡ぢゅるるっ♡♡

「ん……!!?♡♡あ、あっ……♡♡」

ひとときわ強く中の芯を弾かれた瞬間、堪えきれずに濁った声が漏

れた。

声を出したくないのに。自分の意志とは裏腹に、シーツに沈んだ腰が快感に粟立ち、彼の指の動きに合わせてびくびくと跳ね上がってしまう。

（やだ……私、勝手に動いて……っ♡）

「……」

ふいに手の動きが止まり、見上げると、レイドが熱を帯びた瞳で私を見下ろしていた。

「これは、ちがうのっ……♡♡私は……っ♡♡」

「……なら、なぜ俺の指をこんなにもきつく咥え込んでいる」

ぢゅぅぅぅぅっ♡♡ぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅ♡♡

「ひいっ！？♡♡あああっ♡♡」

言い訳を塞ぐように、剥き出しの豆を唇ごと強く吸い込まれた。

それと同時に、中で深く曲げられていた指が、容赦のない速度で前後のストロークを始める。

ぐりゅっ♡ぐちゅっ♡ぐりゅぐちゅっ♡♡

弱いところを的確に捉え、指の腹でぐりぐりと押し回される。逃げようともがく腰を彼の手ががちりと押さえつけ、奥の奥まで執拗に掻き回してきた。

「あっ♡♡んっ♡♡ひあっ……♡♡」

意地を張っていたはずなのに、甘い痺れが腰を跳ねさせる。

「……綺麗だ。俺の腕の中で泣く、あなたの声も……この熱も」

ポツリと溢れた声は、ただの凌辱とは違う、ひどく切実で飢えたような響きを帯びていた。

「やめ……っ♡♡敵の、あなたになんて……っ、ああっ♡♡」

誇り高く拒絶しようとするのに、彼の熱に当てられ、指が引き抜

かれそうになるたびに、もつと奥を抉ってほしいと自分から腰を擦り寄せてしまう。

ずちゅつ、と一番深いところまで指が沈み込んだ。同時に、外の芯を唇で挟み込まれ、息が止まるほど強く吸い上げられる。

「んああ！？♡♡」

逃げ場のない二重の刺激が脳を直撃し、必死に保っていた理性が真っ白に染まった。

「ああ♡♡あ、やあ……そこ、だめ……っ♡♡」

もう声を堪えることなんてできない。唇が勝手に開いて、自分でも聞いたことのないような甘い悲鳴が零れ落ちていく。

（なに、これ……っ♡♡身体の内が、おかしくなりそう……♡♡

♡)

悔しいのに。憎き敵国の将軍に弄ばれているのに、押し寄せる波

に思考がドロドロに溶かされていく。

「あっ♡♡♡んう~~~~も、むりっ……♡♡」

下腹部がきゅうつと締め付けられる。呼吸が浅くなり、足の指先までじんと痺れていく。今まで経験したことのない、何かが弾けそうな切迫感。

「……無理？」

「わかんないっ……♡♡やだっ……なんかっ、くるっ……♡♡」

「……っ、あなたが俺でどうにかなる瞬間を、俺に見せて」

「いやっ……♡♡怖いっ……♡♡」

「怖がらないで。……全部、俺が受け止める」

耳元を掠めるような低い声と共に、中の指がさらに深く曲げられ、急所を容赦なく弾き続けた。無意識に逃げようとする腰を腕ががちりと固定し、限界まで追い詰めてくる。

「あ……ひあっ♡♡やっ、やだ、それえ……!!♡♡♡」

お腹の奥がぎゅうつと絞られた。視界が明滅し、身体のコから火花が散るような感覚。怖い。知らない。こんなの、知らない。

「ああっ♡♡やっ、ら、めえ!♡♡う……あ、あ……♡♡♡」

最も敏感な場所を、限界まで強く吸い上げられた瞬間——張り詰めていた糸が、弾けた。

「あああ~~~~ッッ!!♡♡♡」

びくんっ♡♡びくびくっ♡♡♡♡

何があだか分からない。ただ、身体のコから波が押し寄せてきて、全身を駆け抜けていく。

「ん……っ♡♡♡」

余韻で身体がびくびくと痙攣している。指が中に入ったまま、締

め付けては緩んでを繰り返していた。

「は……あ……」

息が整わない。全身から力が抜けて、指一本動かせなかった。

（今の……何……？）

結局は与えられる快樂に抗えず、こんな——みっともない声を上げて。

生まれて初めての絶頂。それを与え、私をこんな姿にしたのが、敵国の將軍だなんて。

ぬちゅ……っ♡

奥から太い指がゆっくりと引き抜かれる。その生々しい感触に、余韻で痺れた身体がびくっと跳ねた。

私の脚の間に顔を埋めていたレイドが、身を起こす。大きく開かされた両脚の間に割り込むようにして、真上から私を見下ろしてき

た。

絶頂を迎えたばかりの蜜まみれの姿を、至近距離で見られている。恥ずかしさで顔を背けたかったけれど、身体に全く力が入らず、乱れたシーツに背中を沈めていることしかできない。

カチャリ、と硬い金属の音が響いた。彼が軍服のベルトを外す音だ。

「……入れる」

ひどく重く、熱を帯びた声。

その言葉に、熱に浮かされていた心臓が凍りついた。

そうだ。この男は、あの皇子から遠ざけるために『既成事実を作る』と言っていた。——本当の凌辱は、これからだ。

（いや……これ以上は……無理よ……）

カチャリ、と硬い音がした。軍服のズボンが外され、熱くて硬い

ものが、入口に押し当てられる。さっきの指とは比べ物にならない
圧倒的な質量。

「待つ……お願い……っ」

声が震えた。恐怖と絶頂の余韻で、目からボロボロと涙がこぼれ
落ちた。泣かないと決めていたのに。この国に来てから、絶対に敵
に屈しないとずっと堪えていたのに。

「待たな——」

冷たく言い捨てようとしたレイドの言葉が、不意に途切れた。

私を見下ろしていた彼の動きが、ピタリと止まる。強引に押し開
こうとしていた力が、ふっと抜けた。

私の脚を押さえつけていた手が、力が抜けたようにシーツに落ち
る。その時——月明かりに照らされた左の手首に、何かが刻まれて
いるのが見えた。

(……傷?)

乱れた軍服の袖口から覗く、古い傷跡。刃物で斬られたような真っ直ぐな傷ではない。手首をぐりりと囲むように残る、赤黒く盛り上がった痛ましい痕。

無意識だった。恐怖を忘れて、私の指先がその傷跡に触れようと伸びていた。

——その瞬間。

レイドが弾かれたように腕を引き、私の手から逃れた。

「……っ」

見上げると、銀色の瞳が激しく揺れていた。冷酷な將軍の面影はない。まるで、汚いものを見られたことを恥じるような、ひどく怯えた影が差している。

私を組み敷いていたはずの彼の手が、小さく震えていた。

（なんで……？）

さっきまで力ずくで私を奪おうとしていた男の態度ではなかった。

「……やめる」

ひどく掠れた、かすかな声だった。

「……え？」

レイドが私の身体から離れ、ベッドの端へ後ずさった。乱れた袖口を素早く引き下ろして傷跡を隠し、私から顔を背ける。

「な、なぜ……っ。既成事実を、作ると……」

「……俺が夜にこの部屋へ入った。その事実だけで、あの男を牽制するには十分だ」

私に背を向けたその広い背中が、何かを必死に堪えるように強張っている。

（十分だというなら……最初からあんなこと、しなければよかった

じゃない……っ！)

ただ弄ばれたただけだ。そういえば激しい怒りが湧くはずなのに、抗議の声は喉の奥でつかえて出なかった。

この国で最も恐れられる冷酷な将軍が、なぜ途中でやめて私を氣遣うような真似をするのか。

「……扉の前に俺の部下を立てしておく。明日から、この部屋を出るな」

レイドが踵を返し、扉へと向かう。

「食事は運ばせる。不足があれば侍女に命じろ」

「……」

取っ手に手をかけた瞬間、ふと彼の動きが止まった。振り返りはない。ただ、背中越しに――。

「……すまなかった」

聞き間違いかと思ったけれど、レイドは次の瞬間にはもう扉の向こうに消えていた。

ボタン、と重い音が響き、部屋に静寂が戻る。

一人残された私は、乱れたシーツの上にへたり込んだ。身体に全く力が入らない。

太ももの内側がまだひどく濡れていて、さっきまでの行為の名残が熱となって肌に貼りついているみたいだ。

(……なんで、こんな……)

嫌だったはずなのに。敵に触れられて、あんなふうに気持ちよくなってしまうなんて。

最後に、あんなみっともない声を上げてしまった自分が——一番、許せなかった。

(あの人は、一体——)

身体の奥にまだ残る疼きが消えない。むしろ、寸前でやめられたことで、行き場をなくした快感が身体の中に閉じ込められてしまっている。

まだ掌の中に握られていた押し花のペンダントが、汗で少しだけ湿っていた。

(……お母様。私、どうしたらいいの……)

答えは返ってこない。

誰もいなくなった冷たい部屋で、私は忘れられない熱を抱えたまま、静かに膝を抱え込んだ。

翌日から、奇妙な日々が始まった。

レイドは言葉通り、部屋から出ることは許されなかった。扉には外から鍵がかけられている。けれど、特に不便はなかった。食事は侍女が運んでくるし、必要なものは申し出れば与えられる。

人質としては破格の待遇——のはずだった。

でも——広い部屋に一人きりでいると、壁が少しずつ迫ってくるような錯覚に陥る。話し相手もおらず、窓の外に見える空だけが、唯一この世界と繋がっている証だった。

そして、昼間のレイドは徹底的に私に無関心を装った。

「……体調に問題は」

「……ないわ」

「そうか」

たまにふらつと部屋に立ち寄っても、それだけ言ってすぐに出ていく。顔を合わせるの是一日にほんの数分くらいのもので、扉を開

けても部屋の中には入ってくることはない。

まるで、私を視界に入れることすら避けているかのようだった。事務的な確認を一つだけして、逃げるように背を向ける。あの夜、私をあんなにも熱く組み敷いたことなど、初めからなかったかのよう。

(……なんなの、一体)

困惑だけが募っていく。既成事実を作ると言っておきながら、結局最後まではしなかった。

(そもそも、どうして、謝ったりしたの……)

ただの冷酷な敵国の將軍なら、思い切り憎むことができたのに。最後に見たあの苦しい顔のせいで、怒るべきなのか怯えるべきなのか、どうしたらいいか分からなくなってしまった。

夜に寝台に横たわって目を閉じると、身体が覚えているかのよう

に、あの熱が蘇ってくる。

舌で這われた場所。指で暴かれた奥。我慢しきれずに声を上げてしまった、あの瞬間。

無意識のうちに太ももを擦り合わせてしまう自分に気づいて、慌てて足を離れた。

（……最低よ）

敵に身体を弄ばれて、そのうえ忘れられないなんて。自分が情けなくて、枕に顔を埋めた。

——すまなかった。

あの言葉だけが、頭の中に居座り続けている。

あの日から二日間、私はほとんどベッドから動けずにいた。

部屋を訪れるのは、マリアという名の中年の侍女だけだ。彼女は淡々と食事を運び、水を替え、無言で立ち去っていく。私もあの夜の出来事が頭から離れず、彼女に話しかける余裕すらなかった。

敵に弄ばれた屈辱と、自分でも信じられないほど快感に溺れてしまった記憶。それをどうにかして頭の隅に追いやるだけで、あつという間に時間が過ぎていた。

けれど、三日目の朝。

ようやく少しでも冷静さを取り戻した私は、空いた皿を下げて部屋を出ていこうとするマリアの背中に、思い切って声をかけた。

「……ねえ、待って」

「はい。何かご不満がございましたか？」

振り返ったマリアは、感情を読ませない事務的な顔をしていた。

「不満はないわ。ただ……少し、話がしたいの」

「話、ですか」

「ええ。ここでずっと黙って過ごすつもりはないの。この国のこと……あなたが話せる範囲でいいから、教えてもらえないかしら」
背筋を伸ばし、真っ直ぐに彼女の目を見る。

マリアは少し驚いたように瞬きをした。人質の私が、自分から毅然と話しかけてくるとは思っていなかったのだろう。

「……分かりました」

わずかな沈黙の後、マリアの口元が少しだけ緩んだ。この国に来て初めて向けられた、敵意のない表情だった。

「私でお役に立てるのでしたら、何なりと」

それからマリアは、食事を運んでくるたびに少しずつ口を利いてくれるようになった。

アルヴェイン帝国のこと。この城のこと。街の様子。季節ごとの祭り。マリアの口から語られる帝国は、「敵国」という一言では括れない生きた世界だった。そこにも暮らしがあり、人々の営みがあり、笑い声がある。

当たり前のことなのに——戦を通してしかこの国を知らなかった私には、マリアの話はどれもこれも新鮮だった。

「……将軍のことも、お聞きになりますか」

四日目の夕食時。マリアがさりげなく切り出した言葉に、心臓が跳ねた。

聞きたくない。そう思っていたのに、口は勝手に動いていた。

「……聞かせて」

「あの方は、この国の英雄です。五年前の戦で、たった一部隊で敵の本陣を陥落させたと言われています。それ以来、『冷酷な死神』

と呼ばれるようになりました」

「死神……」

「ええ。戦場では血も涙もないと。……けれど」

マリアが少しだけ声のトーンを落とした。

「あの方を恐れているのは、むしろ上の貴族たちです。兵士たちは皆、レイド様を慕っております。確かに冷たく見えるお方ですが、決して理不尽な命令は下さない。だから命を預けられるのだと」

（冷たく見えるけれど……理不尽ではない……）

あの夜のことを思い出す。無理やり既成事実を作ろうとしたけれど、私の涙を見て、最後には自ら身を引いた。

あれは決して、血も涙もない死神の行動ではなかった。

「レイド様の過去については……実は、あまり知られていないのです」

マリアが空いた皿を手に取りながら、ぽつりと言った。

「ご本人が何も語られないので。どこでお生まれになったのか、軍に入る前に何をされていたのかも」

（誰も、知らない……）

私が見た、あの手首の古い傷跡。触れようとした瞬間に見せた、ひどく怯えたような目。

——あの人は、いったい何を隠しているのだろうか。

城での暮らしが数日を過ぎた頃。

運ばれてきた夕食を一口食べて、私はスプーンを持つ手を止めた。白身魚の蒸し焼き。レモンと塩だけのシンプルな味付けは、故郷

の港町で食べた料理とほとんど同じ味がした。

最初は香辛料が強く油も多い帝国風だったはずだ。それが日を追うごとに薄味になり、今日はついに故郷の味そのものになっている。

「マリア、この食事は……」

「将軍からのご指示です。ヴェルニア風の味付けを……と」

息を吞んだ。驚く私に、マリアは部屋の窓辺へと静かに視線を向ける。

「今朝から飾らせていただいたその花も、将軍がご用意なさいました。帝国の気候では育たない花だそうです」

朝、目を覚ました時からずっと気になっていた白い花。星のように五枚の花弁を開いたそれは、私がいつもお守りとして握りしめているペンダントの押し花と、全く同じものだった。

故郷の野に咲いていた花。

この国にはないはずのそれを用意し、食事の味まで変えさせたのが、あの冷酷な將軍だという事実が、深く胸に刺さる。

（……なんで、あの人は）

部屋に立ち寄っても決して中には入らず、まともに目も合わせようとしなくせに。

徹底して冷たく突き放すだけなら、ただの敵として憎んでいられたのに。見えないところでこんな不器用な氣遣いをされたら、どうしていいか分からなくなる。

そっと白い花卉に触れると、指先に微かな甘い香りが移った。

懐かしくて、温かくて——ふと、記憶の底で何かが引っかかった。

（……あれ？）

故郷の匂い。白い花。

そして——ずっと昔、誰かにこの花を手渡したような、おぼろげ

な記憶。

（誰だったかしら……）

相手の顔も、いつのことだったかも霞んでいて、どうしても思い出せない。

私は小さく首を振って曖昧な記憶を振り払い、ただ静かに、故郷の匂いのする花を見つめていた。

その日の夜は、なかなか眠れなかった。

寝台に横たわって天井を見つめる。窓から差し込む月明かりが、花瓶の白い花を青白く照らしていた。

あの夜から、いくつもの夜が過ぎた。

相変わらず彼が姿を見せるのは、昼間のほんの数秒だけ。態度は冷たく、その整った顔からは何の感情も読み取れない。

なのに——毎日のように届く新しい花と、故郷の味に近づいていく食事が、彼の不器用な気遣いを無言で伝えてくる。

（……分らないわ）

冷酷な將軍の、本当の心が。

そして——分らないのに、考えてしまう。気づくと、レイドのことばかり考えている自分がいる。

（……故郷の……仇敵なのに……）

寝返りを打つと、シルクの寝巻きが肌に触れて、あの夜の生々しい記憶がふいに蘇る。

（……あんなこと、早く忘れなきや）

あれはただ、第二皇子から私を守るための建前だった。事実、彼

がああ夜部屋に留まってくれたおかげで、皇子が近づいてくることは一度もなかった。

そこに特別な感情なんてない。そう自分に言い聞かせるのに、彼の不器用な気遣いを知るたびに、胸の奥がじんと熱くなる。

冷たいだけの残酷な仇敵だと割り切れたらどんなに楽だっただろうか。

去り際に聞こえた「すまなかった」という低い声が頭の中でぐるぐると回り、私はそれを振り切ろうと、枕に顔を埋めた。

——どれくらい、そうしていただろうか。

城がすっかり寝静まり、夜の静寂だけが部屋を包み込んでいた時。ふいに、カチャリと微かな音がして、扉が開く気配がした。

（こんな夜更けに……誰？）

マリアが来る時間ではない。身体が強張り、思わず息を潜める。

暗がりの中、足音すら立てずにベッドへと近づいてくる影があった。

隙間を開けたカーテンから差し込む月明かりが、その影を照らし出す。

淡く光る、美しい銀色の髪。

（……レイド？）

「……起きていたか」

低い声だった。けれど、その響きには昼間の冷酷さはなく、何かを必死に堪えているようにひどく掠れていた。

ベッドへと近づいてくる黒い影に、心臓が大きく跳ねる。

昼間は扉の前に立つだけで、決して中には入ろうとしなかった彼が。こうしてこの部屋の奥まで足を踏み入れるのは、あの夜以来のことだった。

「何の用……」

「……」

レイドはすぐには答えなかった。寝台の傍に立ち尽くし、ただ暗闇の中で私を見下ろしている。その銀色の瞳には、冷酷な將軍の面影はない。暗く、重い熱だけが静かに渦巻いていた。

「……あなたに、会いに来た」

低く掠れた——懇願するような声音だった。

寝台の端が沈み込む。覆い被さってきた分厚い胸板から、触れてもいないのに焼けるような熱気を感じて、息が詰まった。

「ちよっと、待っ——」

私の抗議の言葉は、熱い唇に塞がれた。

既成事実はもう十分だと言ったくせに、どうしてこんなことをするのか意味が分からない。

——けれど、私の身体は、彼の熱をはつきりと覚えていた。

次こそは絶対に抗うと決めていたはずなのに、あまりにも優しいキスに私は動けなかった。そこに初夜のような恐ろしい威圧感は微塵もなく、ただ、一秒でも早く私に触れたかったと訴えるような、余裕のない、ひどく切羽詰まった熱だけがある。

ちゅっ♡じゅるっ♡

「ん……っ♡」

私の頬を包み込む大きな手は、微かに震えていた。

髪に、額に、頬に、ただひたすらに優しく甘い口付けが落とされていく。

そのキスは少しずつ下へと這い下り——やがて、私の両脚がそつと大きく開かれた。

「え……あ……っ」

ベッドに膝をついたレイドが、無防備に晒された私の脚の間に顔を沈めた。

ちゅっ……♡ぢゅる……っ♡

「ひあっ……!?!♡♡」

直接触れた熱い舌の感触に、身体が大きく跳ねた。

分厚い舌が入り口を覆う柔らかな襞を押し広げ、剥き出しになった一番上の敏感な突起を的確に捉えると、下から上へと強く舐め上げてくる。

れろ……っ♡ぢゅるるるっ♡♡

「あっ……♡やっ……そんな、だめっ……♡♡」

外側を直接弾かれるような背筋を突き抜ける強烈な快感。何度も何度も同じ急所を挟まれ、音を立てて吸い上げられる。

あっけなく芯から解きほぐされ、自分でも信じられないほどとろ

とろに甘く溶かされていく。

「あああっ♡♡んんっ……むりっ、なんか、おかしく……っ♡♡」

びくんっ、と腰が跳ねた。甘い痺れが下腹部を突き抜け、どろりと熱い蜜が溢れ出す。——けれど、絶頂を迎えてビクビクと震えながら甘く達しているにも関わらず、レイドの顔は離れなかった。

ぢゅうううっ♡♡

「あっ!?!♡♡あああっ!♡♡」

余韻で敏感になりきった場所を、さらに激しく吸い上げられる。溢れ出た蜜を一滴残らず啜り上げるように、舌の動きは執拗さを増していく。

「ま、待って、もう……いやよっ、いやあっ……♡♡」

このままここで舐められ続けたら、本当に頭がおかしくなっ

まいそうだ。

過剰すぎる快感に恐怖すら覚え、私は本能的に腰を引いて逃げようとした。脚を閉じようとシーツを蹴る。

けれど、逃げるより早く、レイドの太い腕が私の太ももの裏をがっしりと掴み込んだ。

「……っ！」

絶対に逃がさないとでも言うように、強い力でシーツに引き戻され、秘所の奥の奥まで丸見えになるほど無慈悲に両脚を大きく開かされてしまった。

逃げ場を完全に奪われたその濡れた入り口に——不意に、太い指が二本、ずぶりと深く沈み込んだ。

「ひあっ！？♡♡ あ、また、ゆびがっ……♡♡」

外側では分厚い舌が敏感な芯を激しく擦り上げ続けながら、中に

入り込んだ指が、容赦のない速度で私を責め立てる。

ぢゅるるるるっ♡♡ぐちゅっ、ぐちゅぐちゅぐちゅっ♡♡♡♡

舌と指で中と外を同時に挟まれる強烈な挟み撃ちに、頭の中が真っ白に明滅する。シーツを力任せに握りしめ、首を激しく振っても快感の波は止まらない。

「ひああああっ♡♡やっ、だめえ~~~~~……ッ♡♡♡♡」

レイドは呼吸すら忘れたように一心不乱に舌と指を動かし続けた。中の弱いところを指の腹で的確に突き上げられながら、外の芯を限界までぢゅぢゅぢゅ……と強く吸い上げられる。

「あっ♡♡あああ~~~~ッ♡♡むりいつ、いつ、いつちやうううッ♡♡♡♡」

二度目の絶頂だった。先ほどよりも遥かに大きく、お腹の底から弾けるような波が押し寄せる。

びくっびくっびくんっ……♡♡♡♡がくがくがくっ♡♡♡♡

「……っ、~~~~~………ッ♡♡♡」

大量の蜜をどろりと溢れさせながら、声にならない悲鳴を上げて身体が弓なりに反り返る。

やがて、中も外も完全に溶かし切ったレイドがゆっくりと顔を上げた。

大きく開かされた私の太ももの間に自身を沈める。

散々責め立てられて蜜の滴る入口に、彼の熱くて硬いものが、ぬちゅ……と押し当てられる。ただそれだけで、頭の芯まで甘い疼きが走った。

「……今日は……もう……止められそうにない……」

ひどく熱を帯びた、掠れた声。

あの夜、彼は途中で自ら身を離れた。けれど、今私を見下ろす彼

からは、私を氣遣って引き下がるような余裕は完全に消え失せていた。

「あっ……ま、待って……」

「……あなたが……欲しい……」

ずぷ……っ♡

「ん……っ♡ふぁ……っ♡」

ゆっくりと、慎重に、先端が侵入してくる。指とは比べ物にならない圧倒的な質量が、中の柔らかな粘膜を押し広げていく。

ずぷ……ずぷうっ……♡

「あっ……だめっ……！抜いて……っ」

未知の太さと熱が、じりじりと内側を押し広げてくる。本能的な恐怖で身体が強張り、私は無意識に彼の分厚い胸板を押し返した。

「……痛いかな？」

動きを止めたレイドの銀色の瞳が、ひどく不安そうに揺れている。まるで、私の痛みを恐れているような顔だった。

「……痛い……っ。だから、やめて……っ！」

本当は、引き裂かれるような痛みなんてなかった。あれほど執拗に濡らされたせいで、私の身体は敵であるはずの彼を拒むどころか、柔らかく呑み込もうとしている。

けれど——それが何よりも恐ろしかった。

（だめ……これ以上入ってきたら……私……っ）

一番奥まで踏み込まれてしまったら、もう後戻りできない気がした。

——身体だけでなく、心までこの敵国の將軍に完全に支配されてしまう気がして、それが怖くてたまらなかった。

「お願い……っ、やだ……離して……っ」

必死に首を振って拒絶する。けれど、押し返す私の手には全く力が入っていなかった。

「……離さない」

私の抵抗を封じ込めるように、レイドの太い腕が背中に回り、逃げ場を奪うようにきつく抱き寄せられた。

「あの夜から……ずっと、狂いそうだった。あなたを、俺のものにしたいくて」

ずぶうつ……♡ぬぷぷっ♡

「あっ……♡んっ♡いやっ……おく……っ♡」

耳元で切実な声を囁かれながら、逃げようとする腰をがちりと押さえつけられる。

拒もうと中をきつく締め付けるほど、かえって内側の肉が彼に絡みつき、ずぶずぶと一番深いところまで導き入れてしまう。

ゆっくりと、けれど確実な力で、一番奥の壁まで押し込まれた。根元まですべてが収まり、お腹の一番深いところまでがレイドの熱で満たされていく。

「……っ、きつい。こんなに締めつけられたら……」

レイドが肩口に顔を埋め、熱い息を吐き出した。帝国最強と謳われる将軍が、私の中に入っただけで余裕を失い、震えている。

ずちゅ……っ♡ぬぷ……っ♡

「あ……っ♡んっ……っ♡」

ゆっくりと、引き抜いては押し込まれる。そのたびに中の壁が擦れ、じわじわと甘い痺れが広がっていく。

（怖い……全部奪われてしまうのが、怖い……はずなのに……っ）

無理やりなのは同じはずなのに、身体が彼を拒んでいないみたい。快感を拾っていく。奥まで入ってきた熱を逃がさないように、私

の中が勝手にきゅうつと彼を締め付けてしまう。

ぱんっ♡ずちゅっ♡

「ひあっ♡♡」

お腹の芯を直接擦り上げるような、深い場所。そこに硬い先端が当たった瞬間、悲鳴が漏れてしまった。

「……ここか」

「んっ♡あっ♡♡やっ……♡♡」

ぱんっ♡ぱんっ♡♡ずちゅっ♡♡

一定のリズムで、けれど決して乱暴にはならないように、深く突かれる。

あの夜と同じだ。決して私を痛めつけようとはしない。私の息遣いや声の揺れを一つ一つ確かめながら、どこを突けば私が一番甘く鳴くのかを探り当て、そこだけを執拗に抉ってくる。

「……俺のものを、こんなに熱く締め付けている」

「ちが……私は……あああっ♡♡」

否定しようと口を開けば、奥を突かれるたびに甘い声が漏れてしまふ。

（どうして……こんなに、優しく抱くの……？）

ただ既成事実を作るだけなら、人質の女をもっと乱暴に扱えばいい。なのに彼は、私の表情を一つ一つ確かめ、痛みを与えないように抱いている。ただの道具のように扱ってくれたなら——憎み切る事ができたのに。

ごりゅっ♡♡

「ひあっ！？♡♡」

一段と深く突き上げられ、目の前が白く明滅した。

「はあっ……あなたの中、熱くて……狂いそうだ……っ」

レイドの声が低く掠れている。私を真っ直ぐに射抜く銀色の瞳は、瞬きすら忘れたように暗く重い熱を帯びていた。

あの冷酷な将軍が、息を荒げ、ひどく余裕のない切実な顔で私を見下ろしている。

ぱんぱんっ♡♡ずちゅずちゅっ♡♡

「あ、い、んんっ♡♡ひあっ♡♡」

「……声を抑えないで。俺で乱れるあなたの全てを、見せて」

「だめっ……♡♡こんなっ……ああっ♡♡」

必死に首を振って声を殺そうとするのに、彼が私の腰を掴んで深く打ち付けてくるたび、意思とは無関係に甘い声が跳ねてしまう。

ぱんぱんぱんっ♡♡ぐちゅぐちゅぐちゅっ♡♡♡♡

「……ッ♡♡あああっ♡♡ふかっ……だめ、そこっ♡♡♡」

一番奥の弱いところだけを、逃げ場のない速度で何度も抉られる。